

シスレーが描いた絵画に見るモレ・シュル・ロワンの都市景観

宮城 光行

1. はじめに

モレ・シュル・ロワンは、パリの南西約65km、セーヌ川とロワン川が合流するロワン川沿いに位置している。ロワン川には大きな橋が架かっている。橋は、町への出入り口となっているブルゴーニュ門へと続いている。また、ノートルダム教会が町のほぼ中央にあり、この町のシンボルとなっている。

モレのこの様子は、19世紀末に、代表的な印象派画家である、アルフレッド・シスレー(1839-1899)によって数多く描かれた。河川沿いにあるモレのまちなみとこれを描いたシスレーの絵画は、ミクロな地区景観を考える上で貴重な素材を提供していると考えられる。

そこで、本研究は、シスレーという画家の目を通したモレの景観の特徴と、シスレーがキャンバスをおいた視点場の特徴を明らかにすることを目的としている。

1-1. 調査分析の方法

分析対象の絵画は、文献に掲載されているものの中からシスレーが描いたモレの絵画を抽出した。そして、現地調査によって得られた写真と描かれた構図との比較を行い、視点場を確認した。推定できた視点場は14地点(15枚の絵画)である。また、中心市街地内の各街路の建物高さ、路上駐車台数を調べ、各交差点について、教会の可視・不可視とその仰角を調べた。

1-2. 論文の構成

第2章では、モレの概要を述べる。

第3章では、既往研究で得られている典型景観の分類に従い、シスレーの絵画の視点場、視対象の特徴を検討する。シスレーが描いたモレの絵画には、「港湾の景観」、「街の全貌を見渡す景観」は存在しない。従って、「シンボリックな建造物の景観」、「道路と建築のパース

ペクティブな景観」、「河川とまちなみの景観」、「道路と河川のパースペクティブな景観」ごとに特徴を述べる。

第4章では、数多く描かれた緩やかに曲がる道路や河川沿いの景観における、景観の技法について述べる。

第5章では、モレの市街地内で教会が見える交差点を調べ、仰角などからその特徴を述べる。

第6章で総括を行う。

2. モレの概要

モレの市街地は、ロワン川と半月状の城壁に囲まれた町であった。周囲の全長は約1400mで、半月状の城壁は、現在道路となっている。中心市街地は、この半月状の道路に囲まれた範囲である(図1)。

サモア門からロワン川沿いにあるブルゴーニュ門までのグランド通りとそれに南北に直行する教会通りとグレ通りに、商店街が形成され、町のセンターとなっている。それ以外の地域は、ほとんど住宅地となっている。ロワン川の右岸には、川沿いに芝生の広場があり、レクリエーション用として機能している。

2-1. モレの街路の特徴

中心市街地における街路の数は119であった。そのうち、D/Hが1.0以上である街路は73、1.0未満である街路は46であった。また、街路の幅員は平均8.2mとなっていた。

路上駐車がある街路は61で、全街路119のほぼ半数

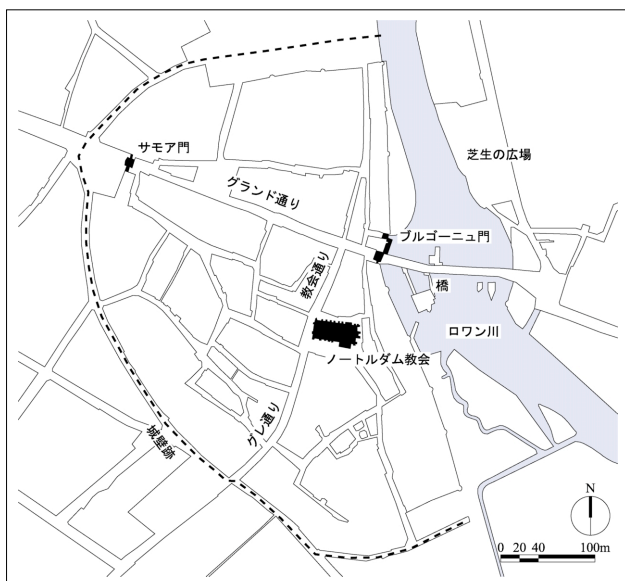


図1 モレの中心市街地

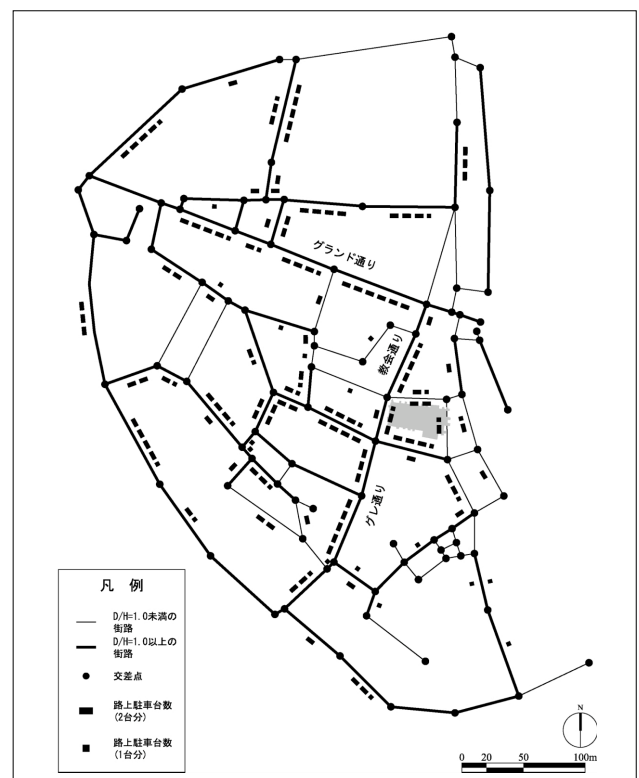


図2 モレの各街路のD/Hと路上駐車台数

に路上駐車があることが分かった。また、路上駐車はD/Hが1.0以上である街路に多く、50の街路で片側のみ路上駐車が存在していた(図2)。

3. 景観タイプ別の視点場、視対象の特徴

景観タイプに従って、各絵画の視点場と視対象の特徴を調べた。絵画の画角、視点場から視対象までの距離、広場や道路のD/H、河川の幅員、流軸角などを表1に示す。また、視点場の位置、視線方向を図3に示す。

3-1. シンボリックな建造物の景観

「日没のノートルダム教会」のみが当てはまる。ロイヤル広場から教会を見る景観である(図4)(地点1)。画角は42度である。視点場から教会までの距離は、約20m(直線距離、以下同じ)、仰角が34.5度である。また、視点場のロイヤル広場のD/Hは1.5となっている。

3-2. 道路と建築のパースペクティブな景観

このタイプには「モレのタネリー通り」(図5)(地点

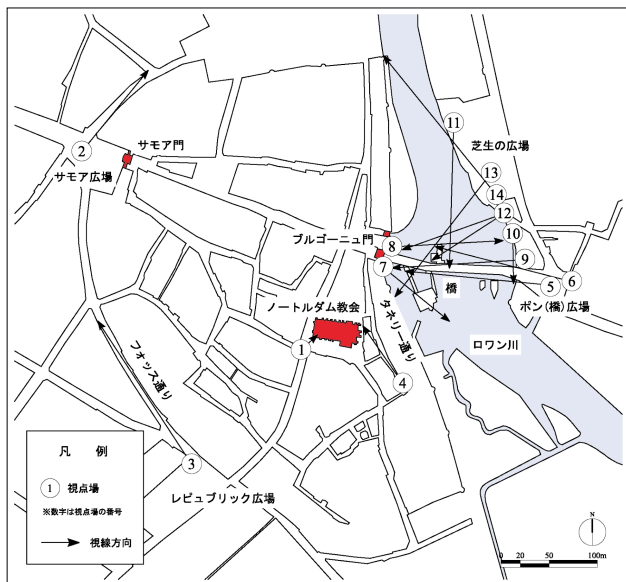


図3 視点場の位置、視線方向

表1 景観タイプ別の視点場、仰角、距離など

視点場No.	絵画名	視点場			視対象			広場・道路・河川		
		名称	画角(度)	広がり視野(度)	名称	距離(m)	高さ(m)	仰角(度)	名称	幅員、D/H(幅員、流軸角)
シンボリックな建造物										
1	「日没のノートルダム教会」1899	ロイヤル広場	42.0	167.0	教会	20.0	23.7	34.5	ロイヤル広場	16.0×82.5m、D/H=1.5~7.7
道路と建築のパースペクティブな景観										
2	「モレ・シュル・ロワンの道」1892	サモア広場	47.0	360.0	建物 山並	46.0 718.0	5.0 60.1	7.3 4.8	サモア広場 シャンブ・デ・マルス通り	34.1×80.0m、D/H=6.7~16.1 8.0m、D/H=1.3
3	「モレの眺め(フォックス通り)」1892	レピュブリック広場	61.0	320.0	建物 樹木	56.0 15.0	4.7 5.7	4.8 15.0	レピュブリック広場 フォックス通り	46×118m、D/H=6.0~15.3 7.0m、D/H=4.6
4	「モレのタネリー通り」1892	タネリー通り	38.0	189.0	教会 建物	70.0 8.3	39.4 9.1	23.8 22.0	タネリー通り	6.2m、D/H=0.74
5	「モレ・シュル・ロワン雨」1888	ボン(橋)	44.0	360.0	ブルゴーニュ門 水車小屋	217.0 101.2	39.5 8.5	10.3 2.8	ボン広場	19.2×50.0m、D/H=2.5~6.6
6	「モレの通り(橋を横切った所からのブルゴーニュ門)」	ボン(橋)	48.0	325.0	ブルゴーニュ門 水車小屋 建物	194.0 132.0 42.0	19.6 8.3 10.9	5.8 2.5 15.0	ボン広場	19.2×50.0m、D/H=2.5~6.6
	平均		47.6	310.8		147.9	19.1	10.0		D/H=7.0
河川とまちなみの景観										
7	「モレのプロヴァンシェの製粉所」1888	河川敷	58.0	144.0	製粉所 ロワン川 水車小屋	50.0 81.0 50.0	11.2 -1.8 11.4	10.0 -1.3 4.5	ロワン川	137m、57.5度
8	「雪に覆われたモレの橋と製粉所」1890	建物の上階	52.0	283.0	対岸の建物 樹木	133.0 103.0	3.5 28.4	1.5 16.0	ロワン川	128m、88.0度
9	「モレの橋」1888	建物の上階	46.0	-	教会、橋など	-	-	-	ロワン川	136m、90.0度
10	「モレの洗濯女」1888	芝生の広場	45.0	261.0	橋	33.0	11.2	10.0	ロワン川	123m、3.0度
11	「橋と水車小屋-夏のモレ」1888	芝生の広場	29.0	360.0	橋 水車小屋	135.0 139.0	5.4 33.0	0.7 4.8	ロワン川	46m、19.0度
12A	「モレの橋-4月の朝」1888	芝生の広場	54.0	204.0	ブルゴーニュ門 橋	150.0 63.3	21.1 4.6	9.0 0.8	ロワン川	102m、66.0度
12B	「モレ・シュル・ロワン」1891	芝生の広場	57.0	360.0	ブルゴーニュ門 橋 樹木	130.0 119.0 79.0	20.8 5.7 3.0	9.2 0.9 2.2	ロワン川	102m、89.5度
13	「モレ・シュル・ロワン-橋と教会と水車小屋の眺め」	芝生の広場	33.0	360.0	ブルゴーニュ門 橋	218.0 128.0	42.3 4.5	11.2 0.0	ロワン川	57m、56.0度
	平均		46.8	281.7		123.0	17.2	6.2		幅員111m、流軸角54度
道路と河川のパースペクティブな景観										
14	「モレ・シュル・ロワンのポプラ並木道-曇り空の朝」	芝生の広場	38.0	360.0	建物 道路	172.0 102.0	12.0 3.0	4.0 -1.7	ロワン川	68m、27.0度

4)をはじめ、5点の絵画が当てはまる。これらは、広場または道路を視点場としていた。画角の平均は48度、視対象までの距離は平均30mとなっていた。また、視点場となっている広場のD/Hは、平均7.0であった。

3-3. 河川とまちなみの景観

このタイプに当てはまる絵画は「モレ・シュル・ロワン」(図6)(地点12)をはじめ8点であった。最も多く描かれた景観タイプである。

これらはいずれもロワン川沿いを視点場とし(地点7、8、9、10、11、12、13)、ロワン川とまちなみを見る景観である。画角は29度~58度である。教会が見えるのは、8枚のうち4枚で、教会までのいずれも200m強であり、仰角は11度~12度程度である。また、流軸角は20度~88度となっていた。

3-4. 道路と河川のパースペクティブな景観

「モレ・シュル・ロワンのポプラ並木道-曇り空の朝」(図7)のみが当てはまる。ロワン川沿いの芝生の広

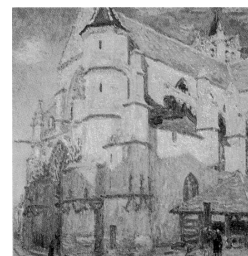


図4 日没のノートルダム教会



図6 モレ・シュル・ロワン

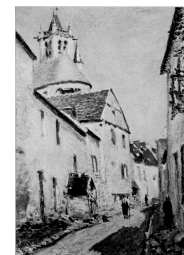


図5 モレのタネリー通り



図7 モレ・シュル・ロワンのポプラ並木道-曇り空の朝

場を視点場とし(地点14)、並木道をパースペクティブに見ながら、対岸にまちなみを見る景観である。画角は38度、流軸角は28度となっている。

3-5. まとめ

以上の調査結果をまとめると以下のようである。

- (1) 視点場は、3つのケースがある。第1は、広場で、主景(教会、橋、門など)がよく見える位置である。第2は、道路が視点場で、焦点を絞って描いている。第3は、橋のたもとで、橋及び対岸のまちなみを見ている。
- (2) シスレーの絵画は、「河川とまちなみの景観」が多く、特に河川を挟んで奥に教会を見るものが多い。
- (3) 視点場から視対象までの距離は、20m～300m程度の距離にあり、おおむね近景の範囲である。

4. 景観の技法から見た絵画に描かれた景観

シスレーは、モレにおいて緩やかに曲がる道路や、河川沿いから対岸を見る景観を多く描いている。これらの絵画に描かれた景観の技法は、モレの都市景観の特徴を示していると考えられる。

4-1. 緩やかに曲がる道の景観

絵画に描かれた要素をもとにして、各視点場から描かれた範囲を推定し、地図に示した(図8)。それによると、描かれた道の見通し距離は、概ね80m～200m程度となっていた。そして、道が緩やかに曲がっているため、道の先が見えず、その奥に何があるのかを期待させるような景観となっている。

4-2. 河川とまちなみを見る景観

河川沿いの視点場について、視点場付近の河川の幅員、絵画中に描かれた水の量を示す水視率、絵画を描いた視線方向と河川の流れる方向との角度を示す流軸

角の相互関係を調べた。流軸角は45度以上で対岸景となり、45度以下で流軸景となる。また、水視率は20%以上で水視率の大きな景観、20%以下で水視率の小さな景観となる。

(1) 河川の幅員と流軸角(図9)

河川の幅員と流軸角の関係を調べると、以下のようであった。河川の幅員が大きくなると流軸角も大きくなり対岸景を見るようになる。逆に河川の幅員が小さくなると流軸角も小さくなり流軸景を見るようになる。そして、河川の幅員が80m～100m程度で、対岸景と流軸景に分かれることが分かった。

(2) 河川の幅員と水視率(図10)

水視率は、2.9%～39.4%となっていた。河川の幅員と水視率の関係を調べると、河川の幅員が大きくなると水視率も大きくなり、小さくなると水視率も小さくなる傾向が見られることが分かった。

(3) 流軸角と水視率(図11)

流軸角と水視率の関係を調べると、水視率の小さな流軸景は2点、水視率の大きな流軸景は1点であった。一方、水視率の小さな対岸景は3点、水視率の大きな対岸景は3点となっていた。

シスレーがモレにおいて描いた河川の景観は、対岸景が多く、水視率は比較的小さいことが分かった。

4-3. まとめ

以上のことから次のようなことが分かった。

- (1) シスレーは80m～200m程度見通せるくらい緩やかに曲がる道を描いていた。
- (2) シスレーの絵画では、河川の幅員が80m～100m以上ならば対岸景を、80m～100m以下ならば流軸景を眺

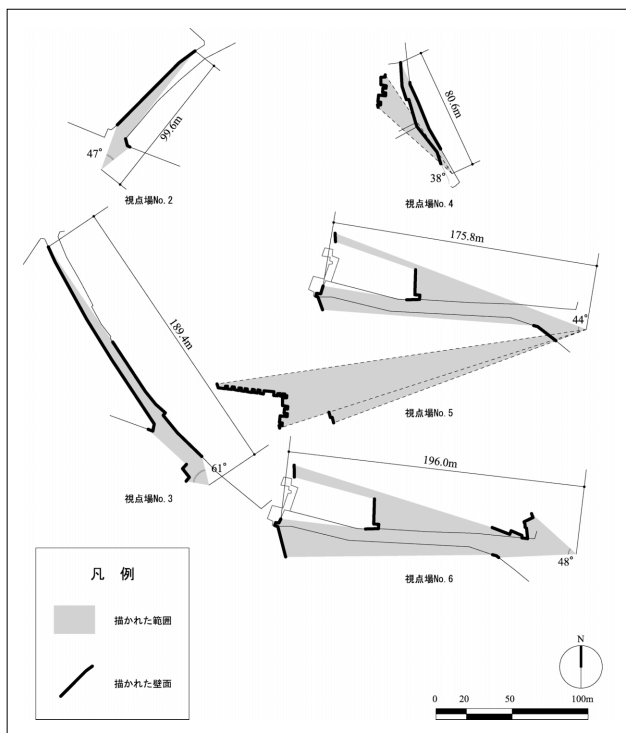


図8 各視点場から描かれた道の範囲

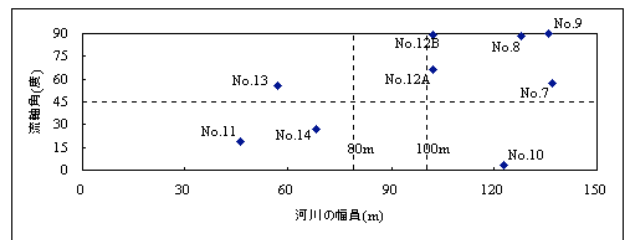


図9 河川の幅員と流軸角の関係

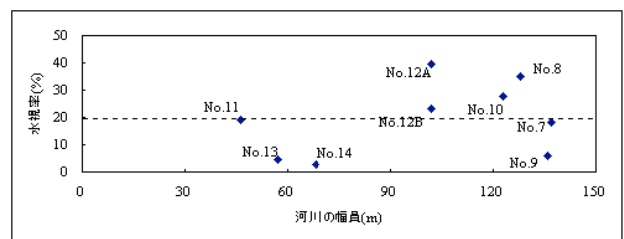


図10 河川の幅員と水視率の関係

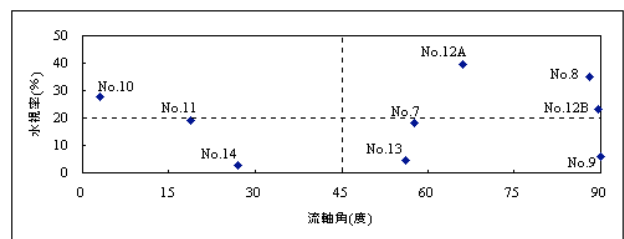


図11 流軸角と水視率の関係

める傾向があることが分かった。

(2)シスレーは、比較的水視率の小さい対岸景を多く描いていた。

5. 教会が見える交差点

シスレーは、モレにおいて教会を見る景観を数多く描いている。教会は、モレのまちのシンボルであり、市街地内のあちこちから見るができるが、市街地内において教会が描かれたのは、2地点だけである。

5-1. 教会が見える交差点と教会を見る仰角

中心市街地内の交差点の数は全部で93であった。そのうち教会が見える交差点は40であった(図12)。その中で教会が描かれた交差点は交差点No. 31とNo. 45であった。

教会を見る仰角は、6.4度～67.8度となっていた。また、教会が描かれた交差点No. 31で29.9度、No. 45で23.1度となっていた。

5-2. 教会が見える交差点における教会の見え方

教会が見える40の交差点のうち30の交差点で、教会が建物の屋根越しや塀越しに見えていた。

教会が描かれた交差点のうち、交差点No. 31では、教会の全体を捉えながら正面を眺めることができる。また、交差点No. 45では、教会の塔と教会の屋根が見え、ある程度教会の全体像を捉えることができる。

5-3. 教会の見え方と教会を見る仰角

教会が描かれた2つの交差点と同様に、仰角が20度～30度程度で教会を見る交差点は幾つかあるが、塔の

みが小さく見える、あるいは塔が見えていなかった。

また、教会を見る仰角が30度をこえると、高仰角になりすぎ、20度未満になると教会を見るには小さすぎる。これらの交差点では、教会は描かれなかった。

5-4. まとめ

以上のことから次のようなことが分かった。

(1)モレの中心市街地の全93の交差点うち、40の交差点で教会が見えていた。

(2)教会が見える交差点の内、教会を見る仰角が30度をこえる交差点では高仰角になりすぎ、仰角20度未満になる交差点では、教会が小さく見えるようになり、教会は描かれなかった。

(3)教会が描かれた交差点では、教会の全体像を捉えられ、教会を見る仰角が20度～30度程度となっていた。

6. 総括

以上の結果をまとめると次のようである。

(1)モレの絵画では、「シンボリックな建造物の景観」、「道路と建築のパースペクティブな景観」、「河川とまちなみの景観」、「道路と河川のパースペクティブな景観」の4タイプの景観が描かれた。

(2)広場や交差点、道路、橋のたもとといった場所が視点場となっていた。

(3)「河川とまちなみの景観」を描いたものが多く、特に河川を挟んで奥にノートルダム教会を見るものが多い。

(4)視点場から視対象までの距離は、20m～300m程度となっており、おおむね近景の範囲であった。

(5)シスレーは市街地やその周辺において、80m～200m程度見通せるくらい緩やかに曲がる道を描いていた。

(6)シスレーの絵画では、河川の幅員が80m～100mを越えると対岸景を、下回ると流軸景を見ていた。

(7)比較的水視率の小さい対岸景が多く描かれていた。

(8)教会が描かれた交差点では、教会を見る仰角が20度～30度程度で、教会の全体像を捉えることが分かった。

参考文献

- 1) 萩島哲、大貝彰、金俊栄、岩尾襄：19世紀ヨーロッパ絵画に見る都市景観に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集、413、pp. 83-93、1999
- 2) 萩島哲：風景画と都市景観、理工図書、1996
- 3) 伊藤ていじ・他：特集・日本の都市空間、建築文化、1963
- 4) ゴードン・カレン：都市の景観、鹿島出版会、1971
- 5) クリストファー・アレグザンダー：パタンランゲージ、鹿島出版会、1977
- 6) Illustrated Guide Book Moret sur Loine (Seine-et-Marne) English Edition, Imprimerie du Confluent, 1999
- 7) Sur les pas des Impressionnistes Alfred Sisley, Les Amis d' Alfred Sisley, 1989
- 8) Richard Shone : Sisley, Phaidon Press Limited, 1979
- 9) 萩島哲：都市風景画を読む 19世紀ヨーロッパ印象派の都市景観、九州大学出版会、2002
- 10) 鶴心治、萩島哲、出口敦、坂井猛、趙世長：広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構成に関する一考察、日本建築学会計画系論文集、482、pp. 155-163、1996
- 11) 坂井猛、萩島哲、出口敦、鶴心治、日高圭一郎：浮世絵風景画に描かれた宿場の景観構成に関する考察、日本建築学会計画系論文集、509、pp. 149-156、1998

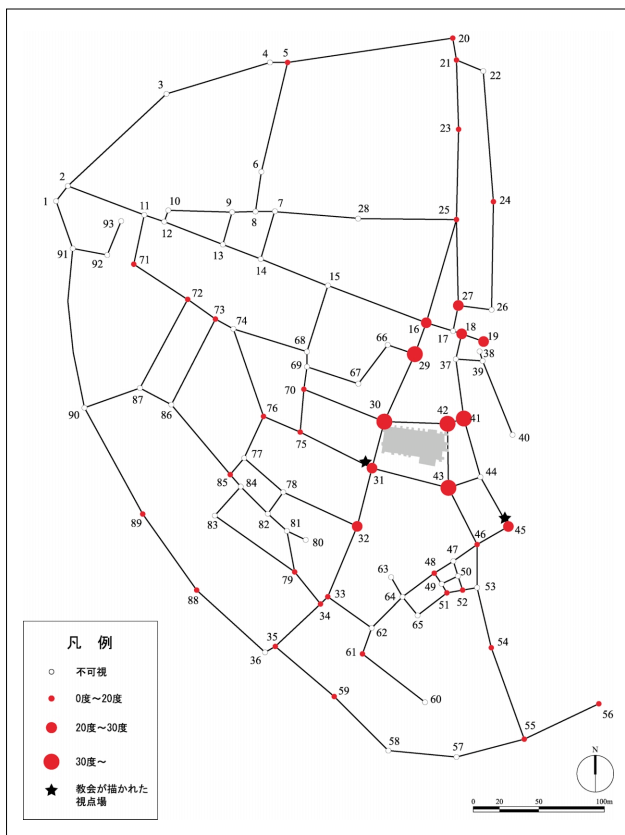


図12 市街地内の各交差点における教会の可視・不可視及び教会を見る仰角